【エッセイ】

さまよえる〈憂い〉
——辞苑閑話・四——

工藤力男

発端

北御門（きたみかど）二郎さんが逝去した翌日、朝日新聞の「天声人語」（2004.7.18）は、さながらその追悼文であった。

　兵役拒否者であった北御門さんは、熊本県の山中で農業を営みながら、ロシア語を独学で習得し、信奉するトルストイの著作の翻訳に勤しんで一生をすごしたという。トルストイが古今の警句を集めてあんだ大著は、北御門さんの訳で『文読む月日』と題して刊行された。その「訳者まえがき」の一部がひかれている。

> この書の翻訳に取り組んでいるあいだ、私はこの世の憂（う）いをいっさい忘れた。いわば私は、祈祷（きとう）の文句にある、〝病いも悲しみも嘆きもなく、ただ終わりなき命のある国〟の住人だった

ちくま文庫版（2003.12）からの引用で、ていねいに読み仮名がふられている。だが、「憂（う）いを」が不審なのでその版をみると、そのとおりの仮名がある。文庫版の元になったのは、三十年前に地の塩書房から刊行されたもの（1983.11）で、引用箇所には振り仮名がない。この振り仮名は、ちくま文庫編集部の判断でつけたものらしい。

　「憂（う）い」は形容詞であるが、今は活発な語ではなく、せいぜい複合語の「ものうい」に用いられる程度で、おおかた類義語「つらい」に吸収されてしまった。形容詞の終

止・連体形は、商品の宣伝文句に「おいしいを食卓に」などをみることはあるが、それはあえて奇を衒った表現であって、普通、この形に格助詞がつくことはない。なぜ、それがここに出現したのだろうか。

動詞「憂う」

形容詞「うい」と同じ漢字「憂」のあてられることが多い動詞「うれう」の近年の用例を探してみることにする。拾いえた数は多くないが、用例に番号をうち、言及箇所に傍線を施す。省略箇所は点線にかえることがあり、改行箇所は斜線で示す。

初めに成城大学『民俗学研究所ニュース』九十三号の文章から。

1　氏は、過去の業績を回顧することは、一般的に斜陽の学問分野でよく起こることであると言い、現在民俗学では議論する必要もない事が議論されている現状があると憂いた。……氏の憂いを受けて、民俗学のさらなる発展を考えるときに、この考えは欠かせないものとなるだろう。（2011.7）

「憂い」が二つみえる。初めのは動詞の連用形、あとのはそれからの転成名詞としての使用である。動詞「憂う」を、五段あるいは上一段活用として用いていることになる。

向田邦子「能州の景」には連用中止形の用例がある。

2　中年女三人が夜を徹してテレビ界を憂い、来し方行末を語り合おうという段取りである。（講談社文庫『眠る盃』p.47）

想定される活用は用例1と同じである。

インターネットをみる。初めに「CNET Japan」の署名入りの文章。

3　【この国を憂うのは尚早か――2007年を振り返る】

今後緩やかな衰退が確実になりつつあるこの国を憂いているのは…（2007.12.26）

標題の「憂う」は連体形、本文の「憂い」は連用形なので、五段活用ということになる。

『週刊金曜日』の「BLOGOS」で少し違う「憂う」に接した。

4　【村山、野中、石原氏らが同席――〝日本を憂う〟円卓会議】

今日を憂えているという政界長老らが、……
（2013.7.22）

標題の「憂う」は、引用符で完結しているなら終止形、下に係っているなら連体形だが、記事の副題なので、文語動詞のつもりなのかもしれない。本文の「憂え」は下一段動詞のつもりだろう。

音声言語の例として、ラジオのニュースからあげる。牛肉の生レバを提供することを禁ずる措置に関する報道で、名詞にかかる例である。

5　今後を憂う声はある。（2012.6.27　午後七時）

これは珍しくはないので、話しことばと書きことばをわけるには及ばないかもしれない。

雑誌や新聞の署名入り記事はおおむね「憂える」であるが、用例をあげるには及ぶまい。

「憂う」の説明

「憂う」の使用に悩む人があって、インターネットの質問サイト、「ヤフー知恵袋」に質問のよせられたことがある。

6　「憂う」を「〜しても」という形にしたら、「憂っても」？「憂いても」？

この質問の「〜しても」の「し」は余分なのだが、本稿には関わらないので無視する。これに対してよせられた回答から選ばれたベストアンサーは次のものである。

7　標準的には「憂えても」ですが、「憂いても」でもかまいません。「憂っても」ではありません。（中略）「憂ふ」の活用形を「憂ひ」とする例がありま す。「愁ひつつ岡にのぼれば花いばら　蕪村」／また名詞の「憂ひ（うれい）」は、上二段活用に由来し、むしろこちらが一般的と言えるでしょう。
（2009.8.15）

この回答者は、下二段活用を本来のものとし、上二段活用はそれからの派生、質問者の五段動詞「憂う」を否としているようにみえる。

一方、右の説明には同意しないたちばの人もある。例えば、朝日新聞デジタルの「ことばマガジン」の【「捧ぐ一打」に「憂うわたし」？】である。福島で行われたプロ野球のオールスター戦の第三戦に起用された、岩手県出身の新人、大谷翔平選手が活躍して特別賞を受けた。それを報ずる記事の原稿の見出しに関するものである。左記のよう

にあった。

8「東北に捧ぐ一打」

実は「捧ぐ一打」とするのは誤りです。／「捧ぐ」は文語の動詞で下二段活用。名詞を修飾する連体形は「捧ぐる」となります。口語の「捧げる」ならば連体形は「捧げる」。「捧ぐる一打」でも文法的には正しいのですが、さすがに古めかしいので、「捧げる一打」としたいところ。(2013.8.7)

筆者は校閲部の人で、その部分を書き直してもらったとして続ける。

9 同じようによくある間違いに、「憂う○○」があります。／例えば、「現状を憂う人々」とするのは誤りで、「憂える人々」とすべきです。／「憂う(憂ふ)」は「憂える」の文語形。下二段または上二段活用で、名詞を修飾する連体形は「憂うる(憂ふる)」となります。口語の下一段動詞「憂える」ならば連体形は「憂える」です。

8・9は模範答案だが少し固すぎる。7のほうが弾力的で現実的な答案といえようか。

「憂ふ」の語史

右に見たように現代人を悩ませる「憂い」「憂う」である。その原因はどこにあるのだろうか。少し大部の古語辞典には、必ずその由来が記されている。大要を稿者のことばで書いてみる。

動詞「憂ふ」は奈良時代に仮名書き例がなく、萬葉集の歌を訓ずる際に悩むところである。巻第十五、山上憶良の貧窮問答歌に「妻子(めこ)どもは　足(あと)の方(かた)に　囲(かく)み居(ゐ)て　憂吟」(892)とある「憂吟」を「うれへさまよひ」と訓じ、巻第十六の短歌「このころの我(あ)が恋力(こひちから)給はずは京兆(みさとつかさ)に出でて将訴」(3859)の「将訴」を「うれへむ」と訓ずるのが一般である。だが、これは確かな訓とは言いきれず、平安時代初頭の用例から遡って、ハ行下二段活用とするものである。語義は、苦しみ・悲しみを明かし、告げて訴えるということだろうか。

平安時代の実態をみるとき、平仮名文では本文の書写の問題が絡んで確かなことはわからない。その難点が克服できる訓点資料には、下二段活用を疑わせる用例はみえないようだ。鎌倉時代になると、活用に変化が現われる。宇治拾遺物語の「うれいの心みなうせぬ」、覚一本平家物語の

「養虎の愁（ウレイ）あるべし」などが上二段活用の例として知られる。室町時代に上二段の例を探す苦労はいらない。

興味ぶかいのは日葡辞書の記述である。『邦訳日葡辞書』から引き写して掲げる。

Vrei, vreôru, vreeta. ウレイ、ゥル、エタ（愁ひ、ふる、へた）欠如動詞。悲しむ。

この辞書の見出しの形「ウレイ」は、日本の伝統的な記述方式では、四段あるいは上二段活用であることを語る。一方、「た」に続く形「（愁）エタ」は下二段活用であることを語る。混合活用ということになる。活用形全部が揃わない「欠如動詞」だともいう。なお、右の「ゥル」は、原著のローマ字綴りの合長音を生かす意図による仮名表記である。

ロドリゲス『日本大文典』（土井忠生訳による）の記述はさらに詳しい。「ウレイ」の肯定活用には八つの語形をあげ、終止形は「ウレウ」、ベシに続いた形は「ウレウベシ、ウレエベキ」の二つがあり、否定活用には「ウレエズ」など三つの語形があがっている。これらをふまえた『時代別国語大辞典室町時代編』は委曲をつくしているが、引用は省く。

エ列音語幹の下二段動詞

下二段動詞はあまたあるのに、「憂ふ」だけが特異な変遷の道をたどったのはなぜだろう。これには、この動詞の語音構造が関係しているのではあるまいか。

『日本国語大辞典』第二版、「憂う」の「語誌」欄の①に左記の記述がある。

下二段活用が古い形で、その「うれへ」が音変化で「うれひ」となり、結果的に上二段活用になったとも見られる。

音変化による現象だと簡単に解釈しているわけだが、はたしてそれでいいのだろうか。『角川古語大辞典』の記述もこれに似て、蛙が「かへる」から「かいる」に転じたと同様の変化で「うれひ」が成立したとしている。

『日本国語大辞典』の「うれえ顔【愁顔】」の項の挙例は三つ、源氏物語、江戸時代初期の評判記『野郎虫』（1660）、そして川端康成「イタリアの歌」（1939）の例10である。

10　咲子は憂へ顔を求められたわけである。

昭和期の小説の表現としても珍しいが、わたしは川端康成の「うれえ」も拾っている。

11　町枝を見ていると、宮子は一人で遠くへ行ってし

まいたいような愁えを感じた。（新潮文庫「みずうみ」p.70）

川端康成の好みによる擬古的な表現だと思うが、わたしには若干の違和感がある。違和感の淵源は、エ列音が「レ・エ」と続くことにあるような気がする。

そう感じたわたしは、『広辞苑』第四版に基づく『逆引き広辞苑』から、「憂ふ」と同じく語幹が二拍の下二段動詞を拾いあげてみた。『広辞苑』は古語も現代語も収めるので、こうした語の探索にはつごうがいい。

「憂ふ」の活用の変化はハ行音の転呼以後に活発になったようなので、ヤ行／ワ行語尾の文語動詞も含めて三つを選び、歴史的仮名遣のままにあげる。語義が把握しやすいように、ほぼ該当すると思われる漢字を括弧書きし、行の頭に標識として語幹末母音を示す。各行内の排列順は任意である。

a	かまふ（構）	おさふ（抑）	さかゆ（栄）
i	をしふ（教）	まじふ（交）	おびゆ（脅）
u	ふるふ（震）	たぐふ（比）	かつう（飢）
e	うれふ（憂）	――	――
o	そろふ（揃）	たとふ（喩）	こごゆ（凍）

この構造の動詞は、「見すえる」などの複合動詞も少し含んで六十ほどあり、語幹末母音aのものが最も多く、それ以外の母音で終るものは多くない。そして、eを有する動詞は「憂ふ」以外に得られなかった。「憂ふ」の孤立は歴然としている。

さきに要約した「憂う」の研究史にみたように、上二段活用の出現は鎌倉時代である。その原因は何であろうか。「音変化」にその原因を求める大辞典を右にみたが、わたしの勘はそれを拒んでいる。右に見たように、エ列音語幹動詞の劣勢という、体系の著しい不均衡に原因があるのではなかろうか。その不均衡を解消するために上二段活用に転じた、わたしはそうにらんでいる。

エ列音容詞のこと

かつてわたしは、北原保雄さんの驥尾に附して、「中世形容詞の終焉」（『論集日本文学・日本語　3　中世』角川書店1979―『日本語史の諸相』汲古書院1999所収）を書いた。中世には存在した、語幹がエ列音でおわる形容詞三十数語が現代語では姿を消した原因について考えたものである。そして、連用形と連体形で進行した音便化にその契機を求め

た。

例えば、形容詞「たけし（猛）」は、今も人名によく用いられるが、話しことばからは消えている。終止・連体形「たけい」、音便化した連用形「たけう」はないのである。「むくつけし」は、文語の連体形が「むくつけきおのこ」のように今も用いられるが、音便形「むくつけい」も音便連用形「むくつけう」も見ない。「しげし（繁）」も、本来形は「足繁く通う」のように副詞として機能するが、音便形「しげう」「しげい」はない。

これを右の動詞に準じて語音構造に着目し、上段に文語、下段に口語の語例をあげる。

a　たかし（高）　たかい
i　かなし（悲）　かなしい
u　ふるし（古）　ふるい
e　たけし（武）　――――
o　とほし（遠）　とおい

語幹末母音「i」をもつ形容詞はシク活用であることが形容詞の特質であるが、この件は本稿に関わらない。この分布の意義については、発見者の北原さんの卓説に譲ってここではふれない。

エ列音形容詞が消滅に至った経過について「たけし」一語で略述する。日本書紀神代巻のある節の「勇悍」について、中近世の写本・版本に「イサミタケク」のほかに、「イサミタキウ」「イサミタケイ」がある。「たけし」の連用形では語幹がタケとタキの間でゆれていたことがわかる。音便化した連用形はtakyuuとなって語幹が保持できないのである。一方、連体形では、語尾のeiが連音化してエ列長音eeが生じたことによると考えた。それが「憂ふ」の活用方式変化の解釈に応用できるのではないか、と思うのである。

先にみた邦訳日葡辞書の「Vrei（憂ひ）」の項に連体形vreôruがあり、それに「ウレゥル」の仮名があてられていた。これを簡便に音声表記したら、uryooruとなるだろう。これには動詞「憂ふ」の語幹であるはずの「ウレ」がなくて、仮名表記のしようがない。過去形vreetaには訳注があり、この時代、エの音はyeなので、vreyetaの誤植だろうという。多分そのとおりだろうが、その長音化は避け難いことであった。そして皮肉なことに、日本語ではエ列音節の連続は好ましくないことであった。

エ列音が重なる語をあげると、「えせ（似非）」、擬態語

「へベレケ」「デレデレ」、応答語「へえ」、笑い声「エへへ」などがある。この音構造の語自体は数少ないが、おおむね好ましからぬ意の語、ペジョラティブに属する。助動詞「べし」の後身「べい」（ぞんざいな発音では「べー」）もそうだろう。「才六」に由来するらしい、関東人が上方の若者を卑しめていう「ぜえろく」も同じ原理によるのかもしれない。語頭が濁音化してさえいる。

この推論に不都合な語としてまず思いあたるのは、関西語の不完全形容詞「ええ」である。古代、日本書紀の歌謡、萬葉集の歌に、ク活用形容詞「えし」の用例がある。平安時代以後それが文献にみられなくなったことを、わたしは、「えし」から「よし」への転換と解釈した。ところが、わたしの師匠、濱田敦は、論文「えい、よい、よろしい」（『國語國文』第五十巻一号　1981―『続朝鮮資料による日本語研究』臨川書店 1983 所収）で拙論に言及し、古代語の「えし」は「よし」に転じたのではなく、常民語として生き続け、江戸時代には規範的な「いい」に対する語になっていたのだとした。これは拙論にとって極めてありがたい解釈であった。

応答語の「ええ」については、まだ適切な説明ができないが、エ列音の重なりが好ましくない語感を与えるということは、ほぼ認めていいのではなかろうか。

〈憂う〉はいずこへ

以上、語幹末にエ列音を有する動詞と形容詞について考えてきたが、読者諸賢の中には、そのたぐいならまだある、と異議を立てる人があるに違いない。わたしも考えている。

エ列音語幹一拍の下一段動詞「蹴る」である。平安時代に成立したらしいこの動詞は、語幹が「け」一拍で、しかも唯一の下一段活用動詞として、文語文法で特異な語であった。「蹴る」は、複合語「蹴飛ばす」「蹴上げ」「蹴込み」などに語幹「け」を残すが、江戸時代半ばにはラ行五段活用に転じて日本語史から消えた。これも、「憂える」と同じく、活用体系の中で孤立する動詞であった。

先にいくつかの用例にみたような使用実態があるのだが、現行の辞書の記述は一様に下一段活用「うれえる」としている。規範主義をとるというのだろうが、やはり怠慢ではないか。それは用例1～3・5をはじめとする五段活用化の実態に目をつむったことになり、6のような質問が

出現する道理でもある。わたしはまだ接していないが、遠からず否定形「憂わない／憂わず」が出現するに違いない。

最後になったが、本稿の標題の〈憂い〉はウレイとよんでいただきたい。

（平成廿六年一月五日小寒）